

II 海外現地調査報告

エジプト・トルコ調査から

大 稔 哲 也

2008年3月2日から3月23日まで、トルコ共和国、エジプト・アラブ・共和国において、中東ムスリム社会における参詣・巡礼に関連する調査を行った。

まず、最初に数日立ち寄ったトルコ・イスタンブルでは、関連刊行資料の収集と写本史料の閲覧・複写を目指した。ここでの狙いは一つに絞られていた。スレイマニエの目録に含まれる（実際にはバヤズィット図書館が保有していた）「エジプト死者の街」参詣書の古写本一点を実見して、できれば複写するというものである。それは、イブン・ウスマーン（615A.H./1218A.D.年没）の著作『*Murshid al-Zuwwâr ilâ Qubûr al-Abrâr*（恭順なる墓々への参詣者への導き）』の写本であった。C. Brockelmannの著名なアラブ文献史『*Geschichte der arabischen Litteratur*』（Leiden, 1937-49年刊）にWelieddin 818とだけあり、関連の研究者が恐らく世界で未だ一度も研究に使用していないものである。私にとっては、16世紀にオスマン朝がエジプトを征服した折に略奪された貴重な写本の可能性があり、是非とも確認が必要であった。また、『*Murshid*』は後代に何者かによって書き加えがなされるという複雑な構成を採るが、その成り立ちの経緯を知る上でも検討は必須であろう。

かつてトルコの写本・文書館は、その閲覧手続きの煩雑さで世界的に悪名高かった。しかし、この約20年間で状況は飛躍的に改善し、今日、例えばスレイマニエの所蔵写本はオンライン上で検索できるようになっている。以前はエジプトの国立図書館（Dâr al-Kutub）の方が遥かに利用しやすかったが、状況は全く逆転してしまったと言えよう。

さて、Welieddin 818の写本であるが、事前にこれがスレイマニエ図書館にではなく、現バヤズィット図書館に所蔵されていることは大凡の見当がついていた。そこで、バヤズィット図書館へ直行すると、あっけなく同写本を確認できた。写本の実物を取り出してみると、予想に反して、比較的新しい筆跡・字形（恐らくオスマン朝期以降）で書き始められていた。しかし、よく見ると、冒頭部（26葉まで）と末尾（95葉以降）はより新しい筆跡部分となっており、両者に挟まれた中間の部分はより古い字体・筆致であった。水分などによって傷んでしまった冒頭部と末尾を、何者かがきれいに書き直したのであろう（一つの可能性としては、この写本がワクフ（寄進）された1761-62年頃に書き直されたか？）。しかし、そのために奥付にあった可能性の高い日付や筆写者などの重要情報が失われる結果となった。

そして、その写本内容について検討の結論を記すと、旧く短いヴァージョンとより新しく長いヴァージョンとに大別される *Murshid* 写本群のうち、この写本は旧く短いヴァージョン群に属するものであった。ここで「旧く短い」というのは、1218年のイブン・ウスマーン没後の情報書き加えが全くない版、という意味である。書き直しされていない中間部分は、エジプトから篡奪されて来た写本である可能性を残すが、そうではない可能性の方が強い。むしろ、より旧そうな筆致のアヤソフィヤ写本¹から書き写した可能性も想定できる。こちらアヤソフィヤ本は奥付（846A.H.筆とする）や筆致から判断して、オスマン朝のエジプト侵攻時に持ち出されたものである可能性が高い。いずれにせよ、バヤズィット本は前後を書き換えられているので断定は困難である。

また、全111葉と小振りであり、明らかにこれを手に取って墓地を実際に参詣できる、ハンドブック的形狀であった。私は、全頁の複写を依頼し、翌日 CD-ROM 形式によってそれを直接受け取ることができた。なお、この検討結果の一部は、『説話・伝承学』第17号に掲載される予定である。

イスタンブルでは、他に多くの書店をめぐるが、筆者にとって最も印象深かったのは、バヤズイットから大学裏手へ回ったところに位置するチャーミー書店である。ここでは、アラブ系の店主や客（イスタンブル大学言語学の教授もいた）が皆アラビア語を話すので、筆者もリラックスでき、店主の出す茶を啜りながら日本の話に花が咲いた。ここでは、カイロで手に入れ損ねていたアラビア語の書籍を購入することが出来た。その中には、オスマン朝支配期におけるエジプト死者の街の参詣書を書いたシュアイビーによるスーフイズム関連の論考も含まれる。

夜分には、筆者の山形大学時代の友人であるアフメット・ジハーン教授（ネブシェヒル大学・社会学）と旧交を温めることができた。

その後、3月5日からはエジプトへと移った。エジプト（特にオールド・カイロ）は通い続けて21年目となる。その間一年も欠かしたことがないと言うのが、筆者のどうでも良い密かな自慢である。「這ってでも行く」という覚悟で自らに課している。ここでは今回、連日エジプト国立文書館(Dâr al-Wathâ'iq al-Qawmîya)に通い、マムルーク朝期(1250-1517)からオスマン朝支配期(1517-1798)にかけてのエジプトのワクフ(寄進財)文書を閲覧した。これはここ数年続けている試みであるが、その狙いはワクフを通じて死者の街(カイロ郊外に展開する広大な墓地区。集団参詣の対象であった)の宗教施設や参詣者へ様々な形の経済的支援がなされていたことを具体的に検証するところにあつた。例えば、以前に調べたスードゥーン・ミン・ザーダのワクフ文書には、参詣者のグループに手当金が支払われていたことが明記されていた。また、このことは四国遍路のご接待などとの比較研究上も、大変興味深い。

現在、国立文書館でワクフ文書の現物は閲覧できず、その複写マイクロフィルムだけに接することになる。とにかくこの全てに目を通すという目標を立て、徹底的に読み進めてきた。ここまで何とか百点以上を読みつないで来てはいるが、状況は容易ではない。とりわけ、同文書館のマイクロ・リーダー機器の状態が悪く、長時間作業を続けると靨面に目をやられてしまう。カイロ大学文学部文書学科の同僚達がみな、目を痛めているのを想起せざるを得ず、こちらも眼の状態を騙しつつの作業となる。また、文書館での作業ばかりとせず、隣接するエジプト国立図書館(Dâr al-Kutub)や他地区のアラブ連盟大学附属写本研究soにおいて、写本(makhtûât)史料を検討する時間を混ぜるなど工夫をした。

今回読み進めたワクフ文書からも、一定の成果を得ることができた。例えば、Nûr al-Dîn Abû Hasan 'Alî b. Badr al-Dîn Hasanのワクフ文書(mahfaza 45, hujja 296, 930/1524年)には、毎週金曜日のワクフ設定者の墓への給付や墓廟に付設の貯水庫へナイル川の水を運ぶ事などが記されていた。また、別のワクフ文書(mahfaza 43, hujja 280, 919/1513年)には、金曜ごとにワクフ設定者の墓へ『クルアーン(コーラン)』を詠んでやることや、香草をお供えするための給付が規定されていた。さらにal-Jamâlî Yûsuf b. 'Abd Allâhのワクフ文書(mahfaza 49, hujja 330, 967/1560年)によると、毎月2ニスフ銀貨分の香草がワクフ設定者の墓へ供えられ、「死者の街」のSîdî 'Alî al-Maghribîザウィヤ(修道場)で使用されるランプの油その他に2ニスフ、同じく小カラーファ(死者の街の一部)のMihmân Khâtûn廟にあるワクフ設定者の墓に手向ける香草やヤシの葉などに対しても、給付が設定されていた。くわえて、Abû Zakariyâ b. 'Abd Allâh Mûsâのワクフ文書(mahfaza 24, hujja 154, 871/1466年、885/1480年)には、サフラー地区(死者の街の一部)に在った墓廟の貯水庫や墓々に供えられる香草の清掃処分などについての詳細な言及が見られた。

Abû al-'Abbâs Ahmad b. Rajab b. al-Sayfî Taybughâ b. 'Abd Allâh のワクフ文書は(mahfaza 15,

hujja 93, 842/1439年)、やはりサフラー地区に在るTushtamur廟やal-Warrâq al-Mâlikî廟のトラビー(墓守、もしくは墓堀人)とワクフ規定の関連を明記していて、非常に貴重な史料であることが今回判明した。シャリーア(イスラーム)法廷台帳が大量に残存するオスマン朝期エジプトであれば、同台帳にこの種の記述が遺されていることを筆者は調査済みであるが、それ以前のマムルーク朝期には同台帳が全く遺っておらず、このようにヴィヴィドな記述がワクフ文書に遺されているということは、ワクフ文書がやはりオスマン朝期以前の時代におけるすこぶる有用な史料群であることを雄弁に物語っていよう。同時に、その利用法に再考を迫るものとも言える。

さて、文書館や図書館の休館日には、「死者の街」と通称されるカイロ郊外の広漠たる墓地区をこれも例年のように巡検した。ここは前近代に世界中から人々が大挙しておしかけた大参詣地であり、エジプト随一の行楽地でもあった。さらに現在では150万人の人々はその墓館に間借りして暮らしている。筆者にとっては必ず毎年訪問して観測せねばならない定点が幾つか含まれており、また墓地居住者のうち、ここ17年間毎年、必ず訪問している家=墓が2軒ほどある。自分にとっての新発見は年々減って来ているが、近年の都市排水による水位上昇のために地下への埋葬がより困難になっている現況や地区の変貌ぶりを確認したり、古老の昔話などを聞き取るのは欠かせない作業である。総じて、私はフィールドでの作業が性に合っており、文書館だけの仕事では、たとえそれが如何に進展しても、心底からの満足は得られないと気づかされる。

さらに空き時間には、カイロ大学やエジプト高等文化評議会、フランス・オリエント考古学研究所などで各国の研究者たちと懇談し、研究情報の交換に努めた。それらの中には、ムハンマド・アフィーフィ(カイロ大学教授)、イマード・アブー・ガズィー(高等文化評議会)、アフマド・ザード(カイロ大学文学部長)、ハサネイン・ラビーウ(カイロ大学名誉教授)、アイマン・ファード(フランス・オリエント考古学研究所)、ステファン・パラディス(同)、ニコラ・ミシェル(エクス・プロヴァンス大学)、その他がいた(敬称略)。また、書店をめぐり、公刊された史資料を蒐集したことは言うまでもない。

今回は日帰りでアレクサンドリアへも赴き、アレクサンドリア大図書館の地下に収蔵されている旧アレクサンドリア県庁所蔵写本を閲覧し、アレクサンドリアの墓誌研究を進めるハーリド・アザブ博士らと研究上の意見交換を行った。くわえて、アレクサンドリア大学文学部図書館を訪ねて、同大学所蔵のアラビア語写本を閲覧しようとしたが、こちらは時間切れとなり門前で閉館となった。やはりアレクサンドリアにあるアブー・アル=アッパース・アル=ムルシーのモスク所蔵の写本コレクションにも貴重なものが多いが、今回調べてみると、ワクフ省の管轄下に入っているため、カイロのサイイダ・ザイナブ・モスクへ移管されたとのことであった。しかし、カイロで確認したところでは、この移管はまだ実施されていないようであった。

最後にエジプト社会の現況に触れておきたい。すでに日本でもしばしば報道されているように、エジプトにおける一部民衆の困窮は極まり、主食のパンを求めての食料暴動や、長期化する軍事独裁政権に対する民主化運動なども重なり、かなり厳しい局面が顔をのぞかせつつある。しかし、ここでは視点を変え、ここ数年来のエジプト(特にカイロ)社会における、都市風景の大きな変化を点描してみよう。その最大の背景をなすのはテレコミュニケーションの急激な進展であると思われる。第1に携帯電話は、設置電話の展開がいつまでたっても追いつかず、経済的にも不可能であった大多数のエジプト人たちにも、ついに電話というツールを与えることになった。これがエジプトの人間関係をまた新たな形で規律しつつある。中古であればかなり安価な携帯電話が出回っており、2台目を購入してお古を家族に与える、などという夢のような話が、庶民間にも実現し始めている。そのため、ポップスのヒット曲などにも携帯電話の会話シーンが組み込まれたり、歌の主題となるケースが出ている。

第2に、衛星テレビ放送の普及である。ディッシュを取り付けられる少数の富裕層が観るのはもちろんで

あるが、庶民街であれば、ディッシュを持つ特定の家から多数の回線コードを周囲のディッシュのない家々へ引き、近所中に衛星の電波を分配してくれるサービスが安価で行われている。これは5年前ぐらいからの現象であるが、この普及はエジプトにおける性表現のコードを明らかに、しかも容易に食い破る結果をもたらした。

第3は、レバノン発を中心としたポピュラー音楽のビデオ・クリップの蔓延である。これは90年代後半辺りから顕著になって来たことであるが、レバノン系のビデオ・クリップは、これもエジプトにおける従来の露出や性表現に関するタブーを破るものであった。これがエジプトの音楽産業にも影響を与え、現在はレバノンとエジプトが互いに類似した様式をもとに切磋琢磨している状況であろう。もともと芸能大国としてのプライドを誇って来たエジプトにとって、この状況は由々しきものでもあろう。ただし、注意深く観察すると、衛星放送やケーブル・テレビで放映されるクリップと、地上波で流されるクリップとの間には差異が認められる。後者からは、過激な露出のものやパレスチナ問題を問うなど政治性を帯びたものが排除されがちである。逆にそのことを利用して、全く相反するイメージの歌曲を歌い分けている歌手もいる。例えば、イスラームを強調した楽曲と、女性の肌の露出を強調した享樂的な楽曲との使い分けなどである。

第4に、中国製品はすでにエジプトの風景を一新したとすら言えよう。その点では、やはり私がフィールドとするマリ共和国へ行っても、部屋のインテリアから家具、所持品までエジプトや中国と類似してしまっている。驚嘆するのは、危険を冒して、カイロの庶民街へも中国人女性が物売りに入り込んでいることである。

ここに挙げたような諸要素は、互いに幾重にも絡み合いつつ、カイロの光景を変えつつあるように思われる。オールド・カイロ地区のような庶民街にまでパソコンが入って来たのは、2007-8年頃の出来事と私は見ている。それは、企業などで更新されて不要になった旧型のパソコンが、中古品として市場にようやく出回り始めたということでもあろう。

以上、最後はとめどなくなってしまうが、これをもって出張報告に代えさせていただきたい。

1 Aya Sofiya 2064 (227fols.)。カイロにあるアラブ連盟大学附属写本研究所がそのマイクロフィルムを所蔵している。(Ta' rîkh 239)。